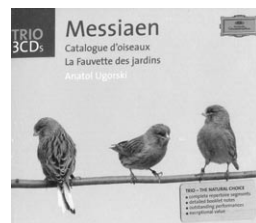


鳥のカタログ

Catalogue d'oiseaux



オリヴィエ・メシアン



オリヴィエ・メシアン (1908~92) は20世紀音楽を代表するフランスの作曲家であり、『鳥のカタログ』(1958)は彼の有名な作品である。ピアノ独奏で演奏時間が二時間半にも及ぶ…と言うと、それだけでうんざりする方もいるかもしれないが、是非一度耳にさせていただきたい。

敬虔なクリスチャンであったというメシアンは、自然に対して畏敬の念を抱き、中でも鳥や鳥の鳴き声に強い関心を持ち、実際に森などを歩き回り、鳴き声を「採譜」した。メシアンは鳥に関する作品を多く残しているが、『鳥のカタログ』はそうした行為の結晶のひとつなのである。古今、鳥というものが音楽の題材に用い

られることは少なくはないが、多くの鳥の鳴き声を「忠実に」再現したのはメシアンが最初と言えるようである。

20世紀音楽という雰囲気が悪い音ばかりだとか、無秩序なものだ、といったイメージをお持ちの方もいるかもしれないが、この曲を聴けば、いかに緻密で色彩豊かなものであるかをわかっていただけたと思う。ここでは聴き易さの点ということで、第四曲目「かおぐろひたき」(Le coq stapazin)を推したい。静寂の中で響けたたましい音の動きを耳にすれば、恍惚となることは間違い無いだろう。

ただ、鳥についての曲だということを知らない人が聴いて、鳥の鳴き声を思

い浮かべることができるかということについては、実際のところ疑問である。鳥の鳴き声だと感じるかどうかは、恐らくリスナーの自由であろう。が、20世紀・現代音楽の解説にあふれがちな「美しい」だとか「自然だ」といった言葉の意味を考えてみることはできるのではないだろうか。(ふい〜る)

!Check!

附属図書館の3階にはメディアコモンという、CDやDVDを自由に楽しむことのできるスペースがあります。『鳥のカタログ』もあるので、是非一度試聴を。

がんばれ!! ばいとくん

第67回 深夜の介護補助

「ええと、ここの式をこう変換するから…」ばいとくんは悩んでいた。しかし、バイトのことで悩んでいるわけではない。明日が期限の課題が難しいから悩んでいるのだった。

今回ばいとくんがやっているのは介護補助のバイト。プロの介護士さんと二人一組になり、老人ホームで介護をする仕事だ。そんな中、ばいとくんが課題にイソシんでいるのは、仕事が無く、介護士さんに「今はこの部屋で好きなことをやっていたいいよ」と言われたからだった。「あれ、もうこんな時間か」時計を見ると針が指すのは午前3時。午後8時からのバイトも、すでに半分を過ぎた。そう、今

回のバイトは深夜の介護補助なのだ。「昼間のバイトとは違って夜のバイトは暇な時間が多いし、バイト代も深夜だから上乘せされるし、こんないいバイトなかなか無いよな。ちょっと眠いけど…」目をこすりながらつぶやくばいとくん。

しかしそんな穏やかな時間は突然、終わりを告げた。「君! 12号室の○□さんが呼んでるから急いで!」介護士さんが慌てて走ってきたのだ! 「えっ!」介護士さんにひきずられるようにして12号室に向かうばいとくん。○□さんを支えてトイレまで行き、トイレを手伝い、部屋に帰って息つく間もなく、「7号室の▲△さんの様子を見に行きましょう」。「はい!」体調の悪い▲△さんの体をふき、寝巻きを変え、洗濯をして…。そうこうしているうちに、別の介護士さんがばいとくとんと介護士さんと呼びにきた。「3号室の×○さんが大変なの! 手伝ってください!」「ええっ!?」そしてまた3号室へ走るばいとくんだった。

そんなこんなで夜が明けて、午前8時。入所者の方々が朝ご飯を食べる時間だ。「朝ご飯ですよ」と声をかけ、トレイを運ぶばいとくん。すると、車椅子のおばあさんがばいとくんに声をかけてきた。「いつもありがとうね。これ、お菓子なんだけど、お友達と食べてね」そんな素朴な優しさに、ほんのりと心が暖かくなったばいとくんだった。

そして、その日の1限にて、お菓子をばくつきながらノートを開いたばいとくん。「あっ課題ができてない…!」

(とぺっと)



はみだし
すてーじ

最近宴会ばかりでオレの財務省が泣いている。
⇒そんな時こそ鳥の鳴き声に癒しを感じて、夜のバイトに励んで…。

(えす 理・1)
(何か間違ってるかも;編)